

宮崎莊平

成尋阿闍梨母集

じょう

じん

あ

じゃ

り

は
は
の
しゅう

全訳注

宮崎莊平（みやざき そうへい）

1933年生れ。1965年東京都立大学大学院修了。国文学（中古文学）専攻。新潟大学法文学部教授。著書に『平安女流日記文学の研究』『中古女流日記文学』（共著）等がある。



講談社学術文庫

定価 360 円

成尋阿闍梨母集

宮崎莊平

昭和54年10月10日 第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話・東京(03)945-1111(大代表)

振替・東京8-3930

装 幀 蟹江征治

レイアウト 志賀紀子

印 刷 廣濟堂印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Sōhei Miyazaki 1979

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0193-584379-2253(0)

(術E)

成尋阿闍梨母集

全訳注 宮崎 莊平

まえがき

『源氏物語』の作者として有名な紫式部の曾祖父（祖父の父）である藤原兼輔は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」と詠んだ。子の親である自分の心は、けつして思慮分別がないわけではないのだが、わが子のことをあれこれと思うとき、不思議と判断力を失い、どうしてよいかわからず途方にくれてしまうことだ、という意味である。この歌が、子を持つ親のだれもが抱く気持の真実をよく言いあらわしているために、以後、長く人々の記憶にとどまり、好んで口にされたり、文学作品に引用されたりしてきた。

この作品『成尋阿闍梨母集』には、右の歌は引用されてはいないが、子を思うがゆえにまどう心を表出して、それを綴ったもので、まさに兼輔の歌を地でいったものといつてよい。

この作者は、はやく夫に先立たれたため、わが子二人を仏門に入れ、二人の子はそれぞれ律師・阿闍梨という高僧となった。その母として作者自身、人一倍信仰心が厚かったはずである。ところが、八十余歳の老齢になったとき、阿闍梨の成尋が修行のために宋の国（今の中国）に渡ることであり、悲しい離別を体験することとなった。そこで作者は、長い人生の

中で身につけてきた分別ぶんべつの心をすっかり忘れたかのように嘆き悲しまずにはいられなくなつてしまった。

その悲嘆のありつたけを、老軀ろうこに鞭打むちうちつようにして書き綴つづつたのがこの作品であつて、哀しいまでにわが子を慕したう老母の思いが、痛いほどに読むものの心に伝わってくる。それゆえこれは、子をいちずと思う母の心が産うんだ文学であるといえる。しかも、内容からみて「集」(家集かしゅう)というよりも、「日記」とよぶにふさわしい作品で、『蜻蛉日記かげろう』以来の女流日記文学の系列に入れるべきものとみられるのである。

目次

まえがき・・・ 3

凡例・・・ 8

〈一巻〉

一 年八十になつてはじめて記す・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

二 子息たちの栄誉を誇りに思う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

三 成尋じやうじんから渡宋とそうの決意を聞く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

四 成尋の出立しゅつたつを前に仁和寺にんわじに移る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

五 成尋との離別を悲しみ嘆く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

六 成尋の旅路を思いやる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

七 ほど経ふかるままに嘆き深まる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50

八 遠ざかりゆく成尋を思う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

九	成尋を慕い、嘆き暮らす……………	62
二〇	成尋を哀慕し、母性愛を披瀝する……………	73

へ二卷

一	飽かず思われて筆を継ぐ……………	86
二	心憂き長い命をいとう……………	90
三	尽きることない悲嘆の涙……………	96
四	泣くよりほかない日々……………	100
五	成尋との離別は夢かと思われる……………	104
六	阿弥陀仏の救いを念じる……………	111
七	立ち寄った成尋と涙ながらに会う……………	120
八	成尋のまたの上京を待ちわびる……………	131
九	法華経歌を詠じる……………	136
二〇	秋のころの記事……………	146
二一	つくづくとわが身の不運を思う……………	152
二二	成尋の身を気づかう……………	157

三	人知れぬ嘆きの思いを詠じ出す……………	162
四	九品蓮台の上を願う……………	168
五	成尋渡宋の報に嘆き深まる……………	174
六	成尋からの文を心待ちにする……………	182
七	隔たりゆく年月を悲しむ……………	193
八	昔物語は虚言でなかったと思う……………	201
九	惜しまれる死をうらやむ……………	208
一〇	繰り返しわが身の不幸を思う……………	215
一一	極楽に参らんことをのみ思う……………	223
一二	身の罪を消し、極楽を待つ……………	229
系	図……………	235
年	表……………	236
解	説……………	243

凡例

一、本書の底本には宮内庁書陵部蔵本を用いた。

二、本書は底本の本文を忠実に活字化することにつとめたが、通読・読解の便を考えて、次のような処置をほどこした。

1、内容上から全体を、一卷（上巻）一〇、二巻（下巻）二二の段落に分け、内容のおおよそが把握（は）できるような見出しを付け、さらに記事のまとまりごとに段落を改めた。

2、句読（くとう）を切り、濁点（だくてん）を加え、会話（くわ）（口頭語）・手紙および心内語の部分は「」にくくり、とくに会話と手紙の部分は改行した。

3、漢字は当用漢字にあるものは、その字体を用い、適宜（てきぎ）かなを漢字に改めた。また、漢字をかなに改めたところもある（猶（なほ）↓かな、哉（さ）↓かな、許（もと）↓ばかり、など）。なお、漢字には、底本のかなを活（い）かしつつ、できるだけ多くルビを付した。

4、かなづかいは歴史的かなづかいに統一した。ただし、いわゆる推量・意志などの助動詞「む」は、底本に用いられている「む」「ん」の両様のままとした。

5、送りがな不足しているところは補った。また、誤脱（ごだつ）と思われる箇所文字を補った。

たところがある。この場合、必要に応じて語釈欄にそのことを記した。

6、踊り字は、漢字二字の場合「々」とし、その他は同字をかさねた。

7、以上3―6の処置については、親しみやすい本文を提供するという本書の性格を考慮して、通読の際の煩瑣を避けるため、本文右側に傍記することを省いた。

三、語釈は、主要なものに限定し、簡明を旨とした。

四、現代語訳は、平易を旨とし読解の助けとした。原文にないが補いを必要とする場合は（一）にくくって示した。

五、各段の解説は、内容把握に主眼をおいた（なお、四―五において、一般の便宜のため、漢字には多めにルビを付けた。その場合、本文中にある語句にも現代かなづかいを用いた）。

六、巻末に関係系図と年表を付載し、読解の補いとした。

七、本書を成すにあたって参考とした主要な研究文献を次に掲げ、蒙った学恩に謝意を表明する。なお、語釈あるいは解説に引く場合、左記『』内に示した略号で記した。

『新釈』 王朝三日記新釈・成尋阿闍梨母日記 宮田和一郎 健文社 昭和二十三年

『島津A』 成尋阿闍梨母集全釈 島津草子 古典文庫 昭和二十八年

『島津B』 成尋阿闍梨母集・参天台五台山記の研究 島津草子 大蔵出版 昭和三十四

年

- 『仏教文学』 日本仏教文学研究・第二集 永井義憲 豊島書房 昭和四十二年
- 『平林 A』 成尋阿闍梨母集の基礎的研究 平林文雄 笠間書院 昭和五十二年
- 『平林 B』 参天台五台山記校本並に研究 平林文雄 風間書房 昭和五十三年

成尋阿闍梨母集

へ一巻

一 年八十になつてはじめて記す

延久三年正月卅日

仁和寺に渡りて、思ひ乱るる南面に、梅の花いみじう咲きたるに、鶯の鳴きしかば、

なくなくもあはれなるかな枝々に木伝ふ春の鶯の声
なほ、申文にて、内にも参らせまほしう、

雲の上ぞのどけかるべき万代に千世かさねますももしきの君

はかなくて過ぎ侍りにける年月のことども、をかしうもあやしきも、かず知らず積り侍りにけれど、それを記し置きて、人の見るべきことにも侍らぬを、年八十になりて、世にたぐひなきことの侍れば、心一つに見侍るが、しばし書きつけて見侍らまほしうて。

〈現代語訳〉

延久三年（一〇七一）一月三十日

仁和寺に移つて、（成尋と離別した）悲しみに氣持が乱れた状態で南に面した部屋にいると、庭には梅の花が美しく咲きほこつており、そこにうぐいすが鳴いていたので、

どんなに鳴いていても（わたしの泣くのととは違つて）情趣深いことだ。梅の枝から枝へと飛び移つて鳴いている春のうぐいすの声は。

それでもやはり、申文で朝廷にお願いして、（成尋を）参内させたかと思つて、

宮中はさぞかしご静穏のことでありましょう。長い長い年月をお重ねになる主上さまよ。

とりとめなく過ぎ去つてしまつた年月の中には、興趣あることも関心をそそられることも、数えきれないほどたくさんありましたが、それらのことを書き記して置いてもだれも見るはずがないと思われましたので（書き記すことなくそのままにしてしまつたが）、八十というこの老齡になつて、世間に類例のない悲しいことがございましたので、その悲しみを自分ひとりだけで心のうちに嘆いていたが（とても耐えられずに）、すこしの間、その思いを書きつけてみようと思ひまして（筆をとつたのです）。

〈語釈〉

○延久三年正月卅日 延久三年（一〇七一）は後三条天皇の御代。これは作者成尋母が大雲寺の成尋のもとから仁和寺に移住した日付。作者にとって記念すべき日付であり、この作品の起点ともなる日付であるために、書写する際に後人によって付記されたものとみられる。ちなみに、この年の一月三十日は陽暦の三月四日にあたる。

○仁和寺 京都市右京区にある御室派の総本山。仁和四年（八八八）宇多天皇によって創建された。「にんなじ」と一般に発音されるが、「にんわじ」ともいい、底本のかな表記は、その「ん」を省略した形の「にわじ」とあり、本文のルビはそれに従って付した。○南面 殿舎の南側に面した部屋。○なくなくも うぐいすのしきりに鳴くこと。作者が悲しみに「泣く」と対比させている。「も」は逆接をあらわす接続助詞で、「……ても」の意。

○申文 任官・叙位などを朝廷に申請する文書。ここは成尋に関しての嘆願の文書をいうのである。○内にも参らせまほしう 朝廷にお願いして成尋の渡宋をやめさせてもらい、いままでもおり修法などで参内させたい、という母（作者）の意向を示すものとみられる。○あやしきも 「あやし」は、普通とちがって変っている、珍しいの意であり、それがために関心がそそられる気持をいう。「あやしき」の下にあるべき「こと」が省略されている。

○年八十 作者の生年は未詳であるが、後出のごとく、三河の入道寂照が長保四年（一〇〇二）入宋のため離京した折（入宋は翌年）、作者は「十五ばかり」であったと記されており、その年十五歳であったとすると、生年は永延二年（九八八）と推定され、この年延久三